

安心して 住み続けるための 新たな集落づくり

「日本一広い村」である十津川村には50を超える集落が点在する。過疎、高齢化により家が1軒のみの集落も存在するという。また、森林面積が9%を占めるこの村は、平地が少ないため斜面に張り付くように建てられた家も多く、山が崩れればひとたまりもない状況がうかがえる。村では比較的平地の高森集落と谷瀬集落に復興住宅を建て、危険集落や限界集落からの移住を進め安心安全の新たな集落づくりを進めている。そこには、



①復興モデル住宅の視察 ②水害慰霊祭への参列 ③高森地区復興住宅建設地の視察

住民が集まるコミュニティの拠点づくりや近隣の福祉施設が集落の生活を支える仕組みの構築など、村の課題解決に向け関係機関や専門家、住民が知恵をしぼった集落づくりがあった。

災害発生時に議会に 求められること

今年、北海道には3つの台風が上陸し、道内各所で大きな被害が発生した。本町でも河川の増水に対し水防団員、消防団員が出動し町内7か所すべての排水機場を稼働させた。災害はいつ発生するかわからない。議会では、災害の発生に備え、次の点を整理し対応していきたい。

- ① **新庁舎建設に向けた災害対策**
災害に強い庁舎と災害対策の拠点機能の充実に向けた取組み。
- ② **災害時の議会の行動**
災害対策本部との関わりや災害時に対する議会としての危機管理行動のあり方。
- ③ **地域防災計画の精査**
計画内容の実効性と内容の精査。

常に災害と向き合っている母村十津川村。今回の訪問は単に母村との絆を知るだけでなく、厳しい自然条件下においても安心、安全を追求する村の姿勢、そして

災害を糧に行政、住民、関係機関が一丸となって進める新たな村づくりの取組みに触れることができ、新十津川のまちづくりにも大いに活かすべきと考えさせられるものであった。

議員母村研修の 意義と目的

議長 長谷川 秀樹

今回の母村研修に当たり我々議員は次の点をポイントとして研修のごとだ。

- ① 新十津川町発祥の原点に立ち戻ってまちづくりを考え直す。
- ② 水害慰霊祭にて犠牲者の霊を慰める。
- ③ 平成23年の災害後の復興の近況を実際に視察し、村民の屈せず、臆せず立ち向かう「二致団結」、「質実剛健」、「不撓不屈」の十津川村民の精神を学ぶ。
- ④ 村民との交流を通じて理解を深め、絆を更に強固にする。
- ⑤ 議員全員で行動を共にすることで共通の認識に立ち、また、議員間の結束をより強固にする。

参加議員の感想

議員母村研修を終えて…

- 十津川村の森林資源の活用や、木材を計画的に供給して需要に結びつける復興住宅の建設の取組みが印象に残った。
- 水害慰霊碑に並んで建立された水害記念碑の碑文にある「復興の苦悶を偲びながら」の言葉が今でも重く心に残っている。
- 生活リスク（災害、孤立集落、高齢化など）に対して、行政、住民、外部専門職のプロシエクトによる課題解決に向けた取り組みは本町でも取入れる必要性を感じた。
- 集落が存在するとは思えない風景に驚く。山頂、中腹、そして山麓にと点在する大小の集落。そのいくつもの集落が結集して幾多の苦難を乗り越えて十津川村を築き、また、村を守るために住み続け開拓し続ける村民。災害から5年間の復旧、復興の充実。心身共に力強さと根強さ、そしてやり通す前向きな姿勢に感動しました。